

富士山麓を案内して下さる映像カメラマンの伊藤浩美さんに、わたしたち夫婦は、それとは別の、もうひとつの素晴らしい世界をのぞかせてもらった。

それは、黒澤明監督とその作品。

伊藤さんはもともと、映画の専門学校出身で、就職先が教育科学映画会社だったため、それまでまったく縁のなかった昆虫の飼育、野鳥や動植物の観察、氷雪の実験などに、撮影の助手として、関わるようになった。人間より、ずっと崇高に生きる自然界の生き物たちに、目を開かされたという。伊藤さんのもつ自然界の知識や知恵が、撮影の場を設定するまでの、気の遠くなるような飼育や待機・観察時間の積み重ねによるものだと知ったとき、彼の口から同時にぽつっと語られた黒澤明監督の名が、わたしの胸に命中した。

それまでのわたしは、ミニ・シアター系映画ばかりを好み、黒澤監督の作品は、「生きる」「七人の侍」「赤ひげ」「デルスウザーラ」「八月の狂詩曲」しか、観ていなかった。

伊藤さんは高校生するとき、それまで観ていた洋画のヒット作品から、はじめての邦画「羅生門」にであい、「日本にも、こんなに素晴らしい監督がいた」と、黒澤明という監督に傾倒していったという。その後は、全38作品を何度も鑑賞、ドナルド・リチーの黒澤評論などを通して、各作品の製作過程・技術手法、その芸術的価値を認識、現在に至っている。

たまたま今年のBSで、黒澤明の全作品放映の機会があり、今まで伊藤さんからレクチャーを受けた数多くの作品を、まるで実地授業のように観ることができた。

戦時中の作品「一番美しく」、戦後の作品「素晴らしき日曜日」「酔いどれ天使」「スキャンダル」の骨太な正義感は、観る者の背筋を思わずぴんとさせた。

伊藤さんのめがねは、自然界の生き物を撮影するときと黒澤作品を鑑賞するとき、わたしから見ると、リアリズムという共通項以外、それぞれ度数が異なるように思えるのだが、ご本人はきつと「いえ、同じですよ」と、さらっと答えるような気がする。